

リメディアル教育用英語検定学習教材の試用

中條清美*・西垣知佳子**

Teaching Remedial English with EIKEN CALL Material

Kiyomi CHUJO and Chikako NISHIGAKI***

This study was conducted to answer the question: would a CALL program, geared to EIKEN-type questions, enable students to improve their English proficiency? Thirty-four beginner-level freshmen English students at the College of Industrial Technology, Nihon University, who reported they did not feel confident about their English ability and whose prior EIKEN scores ranged from pre-second grade to pre-fifth grade, participated in this eleven-week case study. Participants used CALL exercises and quizzes tailored to their own proficiency levels. A follow-up EIKEN Placement post-test indicated overall improvement in proficiency. There was a significant difference between the pre-test and post-test at $p < .01$. Based on learners' responses, it was discerned that the strength of this system was that it allowed learners to proceed at their own pace and that the CALL exercises provided important feedback to learners. The CALL program was more favorably received by the more proficient participants than the less proficient learners within this group.

Keywords: Remedial Education, Eiken, CALL, Placement Test, E-Learning Material

1. はじめに

社会における英語の必要性の高まりを背景として、2001年より日本大学生産工学部では、実用的な英語コミュニケーション能力育成を目指して、一般英語教育科目においてコンピュータ支援語学教育(CALL)を継続的に行ってきた。そしてそのような指導がTOEICスコアの向上に効果をもたらすことを実証的に報告してきた^{1)~4)}。

折しも、文部科学省は2003年に「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」を打ち出し、目標とする

具体的な英語力の指標として、中学校卒業者の平均が英検3級程度、高校卒業者の平均が英検準2級~2級程度の英語力を備え、大学卒業時には「仕事で英語が使える」英語力を達成するという目標を示した⁵⁾。

しかし、現実を目を向けると、大学の大衆化、ユニバーサル化にともない、近年、「英語力をつけたい。でも苦手」「英語力は必要。だから苦勞しないで英語力をつけたい」と考えるような学習意欲に欠ける大学入学者が増えてきた。さらに、「大学全入時代」という今日の高等教育環境の変化の中で、大学生の学力低下も問題となっている。その結果、本学においても、小野(2005)⁶⁾の指摘する次のような状況が現実的な問題となってきた。

*日本大学生産工学部教養・基礎科学系助教授

**千葉大学教育学部助教授

近年の18歳人口の減少、入試の多様化等による入学者選抜競争の緩和は大学生の学力低下問題をもたらしている。その中で多くの大学が抱える最も大きな問題は、優秀な学生の大幅な減少ではなく、同じ大学・学部・学科の新入生間の基礎学力幅が増大し、授業が成り立ちにくくなってきたことである(小野, 2005: 1)

上記で指摘されているような状況がある大学の1年生の英語クラスに見ることができる。受講者の英語力を日本英語検定協会が実施する英語能力判定テストにより算出された英検の級で表示すると⁷⁾、約50名の受講者の級構成比率は、準2級が8.7%、3級が39.1%、4級が21.7%、5級が23.9%、5級以下が6.5%であった。前述の行動計画から言えば、高校卒業レベル(準2級~2級)に該当する学生は8.7%、中学卒業レベル(英検3級以上)に該当する学生は47.8%(8.7%+39.1%)で、残りの半数は中学卒業レベルに達していないことになる。したがって、現実を見据えた目標値を設定するならば、「高等学校卒業段階の目標」を「大学卒業段階の目標」に置き換える必要があると言えるかもしれない。さらに、このような学習者を対象に英語指導を行う立場からは、新入生の学力の低さにも増して、1つのクラスの中に、英検準2級から5級以下までの学習者が混在することは深刻な問題である。

本学において使用されているCALL教材は、およそTOEIC 250点から400点程度の学習者を対象としたものであった。しかし、2005年度を境にこのレベルの教材についてこれられない学習者が目立つようになり、基礎学力の不足のために、従来得られたような指導効果が得られなくなってきた。

これまで毎年、膨大な時間とコストをかけて、本学の学習者の英語力レベルと興味・関心に合致したCALL教材を自主開発してきた。しかしこのように急激な学習者の英語力低下に対して、教材の準備が追いつかない状況に陥った。そこで、学力幅の大きい学習者のほぼ全員に適合するような既存のCALL教材を外部から入手する必要が出てきた。

しかし、そのようなCALL教材を探すのは容易ではない。CALL教材を選定する際には、上記で述べた「対象とする学習者のレベル」だけでなく、他の選定基準も考慮する必要がある。たとえば、どの程度の効果があがるのか「学習効果の目安」が表示されていること、英語学習には継続が欠かせないことから「動機付け」に配慮されている教材であること、定着率の高い「指導法」に基づいていること、「学習履歴」が残ること、学習者が授業後に自宅で教材の続きを「自主学习」できること、そして、実用面からは、現状のコンピュータ設備で「動作」

可能であり、多額の「予算」を必要としないこと、などの項目を検討し、可能な限りこれらの基準に合致する教材が望ましい。

このような教材選定基準を検討した結果、日本リメディアル教育学会が制作、発行している「英検ブリッジ教材」⁸⁾⁹⁾は上記条件の多くを満たしていることがわかった。最大の利点は、英検5級から準1級までレベルに応じた教材を学習できることである。また教材は廉価で、サーバを必要としない。CD-ROM教材であるのでコンピュータの操作に詳しくない英語教師にも導入しやすい。さらに、学生は教材を自宅に持ち帰り、授業の続きを自主学习することも容易である。

本研究では、冒頭で述べた現状及び問題点を踏まえて、大学の一般英語教育クラスにおける、学力幅の大きい英語学習者に対して、英検学習教材を試験的に半期間使用して行ったCALL英語指導実践について報告し、その教育効果を考察した。

以下、2節では本研究において実施した指導実践の概要を述べ、3節では、英語能力判定テストによる指導効果を示し、4節では学習者による指導実践の評価を報告し、考察を行う。5節に結論と今後の課題を述べる。

2. 英検学習教材を利用した指導実践

本実践の指導目標は、学習者の総合的な英語力を向上させることである。本節では、この指導目標の達成を目指して、英検学習教材を中心に据えた半期間(2006年後期)の指導実践の詳細を示す。

2.1 英検学習教材

日本リメディアル教育学会が発行している英検教材CD-ROMは、「準2~5級編」と「準1~準2級編」の2種類がある。本実践の学習者の大半は「準2~5級編」を使用したため、この教材の構成について述べる。

教材に収められている練習問題は英検の過去問題から作成されている。準2級、3級、4級の各級につき、穴埋め(語彙)問題が15問×10回分、並べ替え(作文)問題が5問×10回分、読解問題が2問(各小問5問)×10回分、聴解問題が10問×10回分が用意されている。5級については、穴埋め問題が10問×6回分、並べ替え問題が5問×6回分である。

後期の最初の授業にプレースメントテストとして第1回英語能力判定テストを実施し、学習者個別の英語レベルを通知し、最適レベルの教材から学習を始めさせた。学習記録はフロッピーディスクやフラッシュメモリなどの外部記録装置に書き出すことができる。これを次回の学習時に読み込むことにより、前回の続きを学習することができる。したがって、授業の学習内容の続きを自宅や大学のパソコンルームで自主学习することが容易に

できる。

次節で、本教材を使用した指導実践について報告する。

2.2 指導実践

本研究に参加した被験者34名は、1年次後期に、パソコンルームにおける必修科目の英語授業「コミュニケーションII」を履修した学生である。34名の中には、後述する第1回（プリテスト）と第2回（ポストテスト）の英語能力判定テストと英検期末テストのいずれかを受験しなかった学生、および出席日数が半数に満たなかった学生は含まれていない。実質授業時間は、英語能力判定テストに要する時間を除き16.5時間（90分×11回）である。毎回の授業時間の流れはおおよそTable 1のとおりであった。

Table 1 Classroom Procedure

授業の流れ	時間	内容
導入と復習	15分	短文聞き取り復習テスト
展開	40分	英検CD-ROM教材学習
	10分	復習テストの返却
	20分	短文聞き取り学習
定着の確認	5分	短文聞き取り定着確認テスト

学習者を効果的に学習に集中させるために、授業時間を「導入と復習」「展開」「定着の確認」に分割した。授業の冒頭では、授業の開始を明確にし、遅刻者を少なくするために、短文聞き取り復習テスト（筆記）から始めた。続いて、学習者はCD-ROM英検教材を使用して、各自のレベルに適した英検教材学習を行った。約40分の個別学習の後、次の10分間では、休憩を兼ねて冒頭に実施された復習テストの返却を行い、後半の学習への準備とした。

続く20分間には海外旅行時に頻出する実用的な短文のディクテーション学習を行った。学習の相乗効果を考えると、ここで使用する教材には、英検教材と連動した学習確認テストや英検対応の語彙教材を併用するとさらに教育効果が向上すると期待される。しかしながら本実践ではそのような教材は準備できなかったため、これらの作成は次回の実践への課題としたい。

学習を支援する方策として、学習記録表を配布し、個々の学習者の学習日、学習内容、自習時間を記入させ、毎授業で点検した。また、CALLは個別学習を可能にするという利点はあるものの、授業の一環として実施する場合には、各学習者の到達度を把握し、ある程度クラス全体の学習進度がそろそろように調整する必要がある。そこで、自主学習を促進するためにも、予告した上で、実践の第6回目の授業時に中間テストを実施した。試験は各級の前半5回分の既習問題から出題した筆記テストで

あった。また、授業の最終回で、各級の後半5回分の既習問題から出題した期末テストを実施した。

3. 英語能力判定テストによる指導効果

上記指導実践の効果の測定には、日本英語検定協会で作成された英語能力判定テストを用いた。このテストはTOEICやTOEFLと同様に、項目応答理論に基づく絶対評価のスコアでテスト結果を表示する。そのため、異なる時期に異なる問題のテストを受けても同じ尺度でスコアを比較することが可能である¹⁰⁾。第1回英検能力判定テスト（プリテスト）は2006年度後期の9月の初回授業時、第2回英検能力判定テスト（ポストテスト）は2007年1月の最終授業時に実施し、その差を上昇量として観察した。

Table 2に、学習者34名の第1回テストと第2回テストのスコアを示した。第1回テストの平均スコアは334.5点、第2回テストは368.1点であった。得点上昇（第2回と第1回テストの得点の差）は33.6点、t検定の結果（対応ありの両側検定）は $t(33) = 4.632$ ($p < .01$)であり、指導前後の得点上昇量は有意なものであり、半年間の指導効果がスコアにより確認できた。

Table 2 Pre- and Post- EIKEN Test Scores

	第1回テスト (点)	第2回テスト (点)	得点上昇量 (点)
最低点/最高点	75/455	206/569	-30/131
中央値	348	372	24
平均点	334.5	368.1	33.6

テスト結果を英検の級で表示してみると、第1回テストでは、準2級が3人、3級が15人、4級が8人、5級が7人、5級以下が1人であった。一方、第2回テストでは、2級が1人、準2級が2人、3級が20人、4級が8人、5級が3人であり、授業実践後には「5級以下」と判定された学習者はいなくなった。全体として1級分ずつ向上しているように見える。

学習者のスコアの変動をより具体的に観察するために、Fig. 1には学習者群のスコアを25点きざみに横軸にとり、各スコア帯に該当する人数を縦軸にとり、第1回テスト、第2回テスト別に表示した。白い棒グラフが第1回テストの学習者の分布を示し、黒い棒グラフが第2回テストの学習者分布を示す。学習開始前には、スコアの低いほうに偏っていた分布が半期の英検学習教材の学習の結果、得点の高いほうへと分布の中心が移動していることがわかる。この図からも、一部の学習者が熱心に勉強したために全体の平均点が上昇したのではなく、学習者全体の得点が向上していたことが確認できる。また、

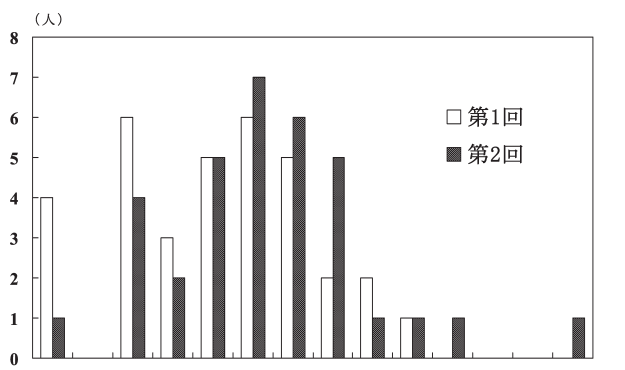


Fig. 1 Differences between Pre- and Post- EIKEN Test Scores

今回使用した CALL 教材が、学力幅の大きいクラスの学習者全般に効果があることが観察できた。その一方で半期の学習を終えた後も、スコアが300点未満にとどまっていた学習者もいた。今後はこれらの学習者への対応を考える必要があることも判明した。

学習者は本実践以外に英語授業を受講していないので、Fig. 1に見るスコア上昇は本授業実践の純粋な教育効果と考えてよいであろう。したがって、本実践の指導目標の総合的な英語力が伸びる英語指導ができたと考える。

4. 質問紙による指導実践の評価

本実践に参加した学習者はクラス内での習熟度の差が大きいだけでなく、興味・関心・意欲などの情意面でも差が大きいと思われた。そこで、ポストテストとして使用した第2回テストのスコアによって34名を、371点以上の上位群18名と、370点以下の下位群16名に分けて、結果の考察を行った。なお、上位群の第2回テストのスコア平均は413.5点、得点上昇は32.9点、下位群のスコア平均は317.0点、得点上昇は34.3点であり、両者の指導前後の得点上昇量は有意なものであった。

4.1 学習者の傾向

実践指導を行った学習者の英語に対する意識調査を授業終了時の1月に実施した。質問項目に対して「強くそう思う(5)」から「全くそう思わない(1)」の5段階評価を

行った結果を Table 3 に示す。

「英語が好き」という項目に対して、5と4の肯定的評価は上位群で61%(22%+39%)、下位群は6%(0%+6%)であった。「英語力に自信がある」という項目に対して、5と4の評価をした学習者は上位群で3人(17%)、下位群は0人であった。このように「英語にはあまり自信がないが英語は好き」という上位群と、「英語は好きでないし自信も持てない」という下位群の学習者が本実践授業に対してどのような反応を示したかを次節から報告する。

4.2 自習時間

高価な CALL システムを導入しても、自主的に学習を継続した学生はほとんどいなかったという報告が示すように^{11),12)}、たとえ良質な教材であっても教材を与えるだけでは学習者は学習行動をおこさない。外国語の習得には膨大な学習時間が必要であることを考えれば、授業時間だけで英語を習得することは不可能であり、自習の時間を増やす工夫が必要である。

このような事情を考慮して、本研究では、学習記録表を配布し、授業外での自習時間を記録してもらった。その結果を Table 4 に示した。本研究の実践は後期に行われたので冬休み中の自習時間も含まれている。また、学習者には学習の目安として「自習20時間(1200分)以上が必要」であることを伝えた。

結果を見ると上位群は週あたり平均2.5時間弱の自習を行い、下位群は2時間超の自習を行っていた。自習回数を見ると、上位群が21.2回、下位群が16.6回となっている。学習記録表の観察も合わせると、上位群はどちらかといえば定期的に自習を行った傾向があるのに比べ、下位群の一部の学習者は冬休みに集中的に自習を行ったようである。しかしながら、「英語はあまり好きでない」という下位群学習者においても平均で週2時間の自習を行っていたこと、さらに「自習20時間(1200分)以上」という学習目標が達成できたことが判明し、本指導実践が学習者のやる気を引き出し、自習を促進したという点について効果を上げたと考える。

本稿では、学習動機を高めるためにどのような学習支援を行ったかを具体的に列挙して説明する節を設けな

Table 3 Students' Feelings toward English

質問項目	評定平均	上位群					下位群				
		5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
英語は好きである	2.9	4 22%	7 39%	2 11%	5 28%	0 0%	0 0%	1 6%	6 38%	3 19%	6 38%
英語力に自信がある	2.1	0 0%	3 17%	7 39%	4 22%	4 22%	0 0%	0 0%	3 19%	6 38%	7 44%

5：強くそう思う 4：そう思う 3：どちらともいえない
2：そう思わない 1：全くそう思わない
上段は人数、下段は%

Table 4 Students' Study Time outside Class

	自習時間 (分)	自習時間 (分/週)	自習回数 (回)
上位群	1589.6	144.5	21.2
下位群	1344.6	122.2	16.6

かった。次年度、本稿と同様の指導実践に改良を加えて実施する予定であるので、その際に改めて報告したいと考えている。

4.3 英検教材を使用した実践の評価

英検教材を使用したCALL授業全般について学習者がどう思ったかを質問紙を使用して、12項目について「強くそう思う(5)」から「全くそう思わない(1)」の5段階で評価してもらった。Table 5には、結果の傾向を把握しやすいように、5と4の評価を「肯定」、3を「中立」、1と2を「否定」に含めることによって3段階評価に変換した結果を示した。数値は回答した学習者の構成比率であり、上位群の肯定の数値の高い質問項目から順に表示した。

まず、本実践に対する全般的な上位群と下位群の傾向を見る。12項目のすべてにおいて上位群の方が下位群よりも肯定的な評価を表示した。また、上位群は12項目中8項目について、過半数の学習者が肯定的評価を示し、実践を高く評価していることがわかった。このような上位群の意欲や関心などの情意面での肯定的かつ積極的な態度が学習面でも良い結果へ結びついたと考えられる。

一方、下位群では肯定的評価が過半数を越えたのは5項目のみであった。このように、同一の教材を使用しても、英語学習に意欲や関心を持っていない学習者に対して、

どのように学習支援を行えばよいかは今後の課題である。学習は動機付けに始まると言われることから、下位群には上位群以上に、自信や達成意欲などの情意面を重視した指導が必要であろう。

次に、Table 5に示した12項目のうち注目すべきいくつかの項目を見ていく。まず、CALLの特性である「1. 結果がすぐわかってよい」「2. 自分に合った進捗で学習できる」の2項目が最も高く評価されている。そして、上位群の83%、下位群の51%が「3. 今後も英検の英語力を増強したい」と表明している。また、上位群・下位群ともほぼ同程度に、教材は「5. 考えながら学習できる」「6. 1日分の問題数はちょうどよい」「9. 難しさはちょうどよい」としており、教材が学習者中心の指導に適したものであること、教材のレベルが適合していることがわかる。しかし、「4. 英語力の向上に役にたつ」「7. リラックスして学習できる」「8. 段々力がつく」の項目に関しては、両者の評価は大きく分かれる。このように評価が分かれる原因はこれから明らかにしていかなければならないが、そのうちの1つはコンピュータリテラシに関係している可能性も考えられる。数名の下位群の学習者が学習履歴を消してしまうことがあったため、コンピュータの扱いに緊張したのかもしれない。教材使用法のガイダンスを充実させることは次回への課題となった。

4.4 CD-ROM教材の評価

英検教材のプログラムについての集計結果を、質問項目とともに、Table 6に示した。Table 5に見られた傾向と同じく、すべての項目において上位群の学習者の評価は下位群を大きく上回った。「プログラムの起動」に関する評価が6項目中、両群とも一番低かった。

Table 5 Evaluation for the EIKEN CALL Activity

質問項目	上位群			下位群		
	肯定	中立	否定	肯定	中立	否定
1. 結果がすぐわかってよい	100	0	0	69	19	0
2. 自分に合った進捗で学習できる	89	11	0	81	19	0
3. 今後も英検の英語力を増強したい	83	11	6	51	31	19
4. 英語力の向上に役にたつ	72	22	6	44	44	13
5. 考えながら学習できる	67	22	11	62	31	6
6. 1日分の問題数はちょうどよい	67	28	6	50	31	19
7. リラックスして学習できる	67	33	0	38	56	6
8. 段々力がつく	56	28	17	25	56	19
9. 難しさはちょうどよい	45	50	6	44	50	6
10. 好きである	45	22	33	6	63	31
11. 次のレベルも使いたい	39	28	33	19	25	57
12. 飽きないで学習できる	33	33	33	12	56	31

単位 %

上記に関連して、質問紙に設けた自由筆記の項目に書き込まれた改善要望の中には、「起動が遅かった」「暗証番号はいらわないと思う」「データを保存しても消えてしまっていて、また最初からやるなんてやる気がなくなってしまった」「保存が少し面倒くさかった」という感想があった。このような事情で、「起動」に関する評価が低かったと思われる。プログラムの起動操作の方法について改善の余地があると思われる。

Table 6 Evaluation of the EIKEN CALL Material

質問項目	上位群			下位群		
	肯定	中立	否定	肯定	中立	否定
プログラムの起動	45	39	17	19	44	38
画面のデザイン	50	39	12	31	38	32
文字の読み易さ	83	11	6	63	31	6
音質	61	28	12	38	38	25
プログラムの使い易さ	61	33	6	31	38	32
CD-ROM 教材の総合評価	62	28	11	31	50	19

単位 %

4.5 英検教材のイメージ

最後に、英検教材について学習者が持ったイメージについて5段階評定した結果を **Table 7** に示した。○は中央値を示し、右端の数値は平均値を示す。上位群、下位群ともすべての項目において、中央値は3.0以上、平均値は2.5以上の評価が得られた。また、中央値、平均値とも、「① 意味がある」「⑤ 価値がある」「⑨ わかり易い」の項目において高い評価を得ていることから、学習者が教材に対して好意的、肯定的なイメージを持っていると判断してよいであろう。

5. まとめと今後の課題

多様な入試形態の広がりによって、英語を入試科目に

課さない入試方式が増加している。今後、大学では新入生の英語学力の低下、また、英語力格差の増大という傾向がますます強くなることが予想される。そのため、本研究で試用した英検教材のように、英検5級程度のリメディアルレベルから始め、準2級から2級へと段階を経て、最終的には「仕事で英語が使える日本人」の育成へとつながる英語教材が必要である。

本研究では、1節に述べたような大学英語教育の現状にある問題を改善する方策の1つとして日本リメディアル教育学会で開発されたCALL教材を試用し、半期間の指導後に、標準テストである英語能力判定テストのスコアの向上に効果が見られたことを報告した。

日本大学生産工学部においては、2001年度よりCALLを導入し、コミュニケーション力養成を目指して、同一の教材をほぼ同じ進度で進めるといった指導方式で初級レベル学習者に対する指導を行い、その教育効果を検証、報告してきた。しかし、現在では中学・高等学校で身につけるべき基礎学力の定着が不十分なまま多くの新入生が大学に入学してくる。そのためクラスの中の英語習熟度のバラツキが大きくなり、1レベルの統一的な教材では受講者全員に達成感を与えることは困難になっている。

本研究では、本学のCALLにおいてリメディアル教材を試用して半期間の授業実践を行い、一定の教育効果が得られたことを検証できた点において意義があると言える。本指導実践では、学習者の英語力レベルとニーズに合致した教材を使い、学習者を自主的な英語学習に導けば、高い教育効果を期待できることを示した。

今後の課題の一つとして、今回はディクテーション教材で代用させた指導教材の部分に、学習の相乗効果に配慮した教材を自作作成して追加使用し、他教材との組み合わせを緻密に計画したCALL英語カリキュラムを策定し、実証的な研究成果を積み重ねていきたいと考える。

Table 7 Students' Impressions of the EIKEN CALL Material

	上位群					平均	下位群					平均
	5	4	3	2	1		5	4	3	2	1	
① 意味がある	はい	○			いいえ	3.9	はい	○			いいえ	3.4
② 楽しい	はい		○		いいえ	3.0	はい		○		いいえ	3.1
③ 夢中になる	はい		○		いいえ	2.8	はい		○		いいえ	2.9
④ 簡単	はい		○		いいえ	3.0	はい		○		いいえ	3.1
⑤ 価値がある	はい	○			いいえ	3.9	はい		○		いいえ	3.5
⑥ 魅力がある	はい		○		いいえ	3.2	はい		○		いいえ	3.3
⑦ 役に立つ	はい	○			いいえ	3.9	はい		○		いいえ	3.3
⑧ 使い易い	はい		○		いいえ	3.2	はい		○		いいえ	3.6
⑨ わかり易い	はい	○			いいえ	3.3	はい		○		いいえ	3.8
⑩ 集中できる	はい	○			いいえ	2.3	はい		○		いいえ	2.9

謝辞 本研究の実施に際し、日本リメディアル教育学会
会長・メディア教育開発センター 小野博教授のご
助言、ご協力を頂きました。

参考文献

- 1) 中條清美, 福島昇, 須田理恵, 木内徹, M. ジナング,
B. ペリーセ (2002)「CALL システムによるコミュニ
ケーション能力養成の指導効果」『日本大学生産工学
部研究報告』35: 1-9.
- 2) 内堀朝子, 中條清美 (2004)「文法指導による大学初
級レベル学習者の英語コミュニケーション能力養成
の効果」『日本大学生産工学部研究報告』37: 75-83.
- 3) 中條清美, 西垣知佳子, 内堀朝子, 山崎淳史 (2005)
「英語初級者向け CALL システムの開発とその効
果」『日本大学生産工学部研究報告』385: 1-16.
- 4) 内堀朝子, 中條清美 (2006)「CALL システムを用い
た大学初級レベル学習者の英語コミュニケーション
能力養成の累積的效果」『日本大学生産工学部研究報
告』39: 21-28.
- 5) 「英語が使える日本人」の育成のための行動計画
[http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/15/03/
030318a.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/15/03/030318a.htm)
- 6) 小野博, 村木英治, 林規生, 杉森直樹, 野崎浩成,
西森年寿, 馬場真知子, 田中佳子, 國吉丈夫, 酒井
志延 (2005)「日本の大学生の基礎学力構造とリメ
ディアル教育」『NIME 研究報告』6: 1-6.
- 7) <http://www.eiken.or.jp/placement/index.html>
- 8) 小野博 (監修) (2006)「The Learning Material for
Eiken 5 級~準2 級」(ソフトウェア) 日本リメ
ディアル教育学会.
- 9) 小野博 (監修) (2006)「The Learning Material for
Eiken 準2 級~準1 級」(ソフトウェア) 日本リメ
ディアル教育学会.
- 10) <http://www.eiken.or.jp/placement/index.html>
- 11) 望月正道, 片桐一彦 (2003)「ネットアカデミー利用
実態報告:平成14 年9 月-平成15 年1 月」,『麗澤
大学紀要』76: 175-185.
- 12) 松本青也 (2003)「e-Learning の可能性」『Step 英語
情報』7(3): 56-59.

(H 19. 2 .10 受理)

